国立療養所寿康館にて
罪の赦し
――使徒行伝第９章31～43節――

１９５８年1月26日
小池辰雄

罪からの解放　霊肉渾然たる救い　全存在の医し　潔め・義認・聖化　十字架と復活は既にヨルダン河で　赦すことは愛すること

【使徒行伝９】

31かくてユダヤ、ガリラヤ及びサマリヤを通じて、教会は平安を得、ややに堅立し、主を畏れて歩み、聖霊の祐助によりて人数いや増せり。
32ペテロは徧く四方をめぐりてルダに住む聖徒の許にいたり、33彼処にてアイネヤという人の中風を患いて八年のあいだ牀に臥し居るに遇う。34かくてペテロ之に『アイネヤよ、イエス・キリスト汝を医したもう、起きて牀を収めよ』と言いたれば、直ちに起きたり。35ここにルダ及びサロンに住む者みな之を見て主に帰依せり。
36ヨッパにタビタと云う女の弟子あり、その名を訳すればドルカスなり。此の女は、ひたすら善き業と施済とをなせり。37彼そのころ病みて死にたれば、之を洗いて高楼に置く。38ルダはヨッパに近ければ、弟子たちペテロの彼処に居るを聞きて、二人の者を遣し『ためらわで我らに来れ』と請わしむ。39ペテロ起ちてともに往き、遂に到れば、彼を高楼に伴れてのぼりしに、寡婦らみな之をかこみて泣きつつ、ドルカスが偕に居りしほどに製りし下衣・上衣を見せたり。40ペテロ彼等をみな外に出し、跪づきて祈りし後、ふりかえり屍体に向いて『タビタ、起きよ』と言いたれば、かれ目を開き、ペテロを見て起反れり。41ペテロ手をあたえ、起こして聖徒と寡婦とを呼び、タビタを活きたるままにて見す。42この事ヨッパ中に知られたれば、多くの人、主を信じたり。43ペテロ皮工シモンの家にありて日久しくヨッパに留まれり。

●罪からの解放

31かくてユダヤ、ガリラヤ及びサマリヤを通じて、教会は平安を得、

ステパノの殉教の死につづいて、しばらく迫害があったのですが、「教会は平安を得」とあります。御霊により安らかなるところにおかれた。この「教会」という語は単数で書か

れていまして、「エクレシヤ」のことです。ドイツ語で
Gemeinde（ゲマインデ）〔共同体〕
のことで、建物をいう教会ではなく、「キリストの群」という一番、根源的な意味です。

ややに堅立し、主を畏れて歩み、聖霊の祐助によりて人数いや増せり。

「聖霊の祐助」という字は「パラクレートス」という字と同じ字で、聖霊を別の言葉でいったわけです。

教会は、使徒行伝の始めの方で学んだように、その御霊によって立てられるものです。御霊が「エクレシヤ」の権威者です。三位一体の神であるこの御霊の神です。ですから、教会の本当の平安というものは御霊がなければない。

32**ペテロは徧く四方をめぐりてルダに住む聖徒の許にいたり、**

「ルダ」というのは「ツロ・シドン」の「ツロ」で地中海沿岸の都市です。

33**彼処にてアイネヤという人の中風を患いて八年のあいだ床に臥し居るに遇う。** 34**かくてペテロ之に『アイネヤよ、イエス・キリスト汝を医したもう、起きて床を収めよ』と言いたれば、直ちに起きたり。** 35**ここにルダ及びサロンに住む者みな之を見て主に帰依せり。**

この「イエス・キリスト汝を医したもう」は、不定過去的現在でありまして、
「イエスはかつて癒し給い、またいつでも癒し給う」
といった気持です。

このペテロの記事とマルコ伝の2章の始めの方のイエスの記事とを比べてみましょう。

「1**数日の後、またカペナウムに入り給いしに、その家に在すことを聞きて、** 2**多くの人あつまり来り、門口すら隙間なき程なり。イエス彼らに御言を語り給う。** 3**ここに四人に担われたる中風の者を人々つれ来る。** 4**群衆によりて御許にゆくこと能わざれば、在す所の屋根を穿ちあけて、中風の者を床のまま つり下せり。** 5**イエス彼らの信仰を見て、中風の者に言いたもう『子よ、汝の罪ゆるされたり』** 6**ある学者たち其処に坐しいたるが、心の中に、** 7**『この人なんぞ斯く言うか、これは神を瀆すなり、神ひとりの外は誰か罪を赦すことを得べき』と論ぜしかば、** 8**イエス直ちに彼等がかく論ずるを心に悟りて言い給う『なにゆえ斯ることを心に論ずるか、** 9**中風の者に「なんじの罪ゆるされたり」と言うと「起きよ、床をとりて歩め」と言うと、いずれか易き。** 10**人の子の地にて罪を赦す権威ある事を汝らに知らせん為に』――中風の者に言い給う――** 11**『なんじに告ぐ、起きよ、床をとりて家に帰れ』** 12**彼おきて直ちに床をとりあげ、人々の眼前いで往けば、皆おどろき、かつ神を崇めて言う『われら斯の如きことは断えて見ざりき』」（マルコ2・1～22）

これはイエスが中風を医された記事です。ここで最も重大なことは、

「**子よ、汝の罪ゆるされたり**」

というところです。イエスは中風の者の本質を洞察されて「罪赦されたり」と言われた。

人々が集まっていて中に入れない。それで「屋根を開けて」とあります。この中風の病人と、中風をかついで来た人たちとが、心を一つにして中風の人の助けられんことを願った。信仰というものはキリストの恵みに対する願いです。彼らの自覚は中風の者が罪人であるかどうかは、はっきり知らなかったと思います。けれども、キリストは求めの切なるにより、「彼らの信仰を見て」言われた。中風の者の一番の中心問題は何かというと、罪の問題なのです。

キリストの救いは何から始まるかというと、このマルコ伝の1章にもありますように、

「『**時は満てり、神の国は近づけり、汝ら悔改めて福音を信ぜよ**』」（マルコ1・15）

悔い改めて福音を受けとること。そこで、キリストはこの悔い改めの問題の中心である罪の問題をここに持ちだされた。

「**子よ、汝の罪ゆるされたり**」

これは求めていた人たちにも不思議な言葉です。ペテロもパウロもこの罪の赦しということを言っています。この罪の赦し「贖罪」ということがキリスト教の中心です。

私はあまり

「キリスト教」

といいたくない。キリスト教といいますと、なんだかキリストの「教え」となります。「教え」となると、

「あの言葉、かの言葉」

というように何か教訓のように響きます。だから、「キリスト教」というよりも

「福音」

といった方がぴったりします。福音とは

「福しき音信（よろこばしきおとずれ）」

です。この方がはるかに聖書の事態を端的に言い表わしているように思います。

何が喜ばしきおとずれか。その中心は

「私たちの罪が解放された」

ということです。これは根本的な福音の中核です。「罪の赦し」のないところには、どんな霊的な良きことがありましても、それは究極的な救いにはならない。罪の赦しを本当に受けとらなかった人たちは、この信仰の中に入れなかったと思う。けれども、罪のゆるしを本当に受けとっていった連中は、使徒行伝に出て来る使徒たちです。ですから、彼らは限りなく展開していきました。その意味においてキリストがこの中風の者に、

「**子よ、汝の罪ゆるされたり**」

と言って、医（いや）しの恩寵の徴を表わされたことに注目しなければならないと思います。

罪のゆるしということは何もただ、自分で罪ということを
「罪、罪、罪」
と意識することではない。
「どうも私は罪びとで……」
と、自分の罪だけ、暗いところばかりを見ていることが罪の赦しを深くすることではない。本当に
「キリストに交わる」
ことは、罪からの解放されたる
「恩寵の場に立つ」
ことです。

●霊肉渾然たる救い

私たちの罪の赦しにおいて大切な事は自分の横に対する関係にもあります。キリストは、
「供物（そなえもの）を祭壇のまえに遺（のこ）しおき、先ず往きて、その兄弟と和睦（わぼく）し、然るのち来（きた）りて、供物をささげよ。」（マタイ５・24）
「祈るとき、兄弟と喧嘩したならば、仲直りをしてから祈れ、また、捧げものをせよ」
と。また、キリストは主の祈りの中で、
「我らに負債（おいめ）ある者を我らの免（ゆる）したる如く、我らの負債をも免し給え。」（マタイ６・12）
「我らに罪ある者を赦したる如く我らの罪をも赦し給え」
と。私たちは横の関係において本当にキリストの赦しをもって赦していなければならない。相手がどんなに思っていても、憎んでいてもいいですよ。その人と現実に握手しなくてもいい。でも、こちらが本当にキリストの赦しの場において赦してやればいい。
「キリストの赦しの場において赦す」
ということは、ただの妥協ではない。
その人を赦してその人のために執成しの場に入ったならば、こちらの魂は本当に進んでいく。この「我」というものがなくなっている、捨てられている、砕かれている場において祈る祈りは必ず浸透していく。そして、その祈りは本当に聞かれていく。その祈りには本当の力が出てくる。これは皆さん、自分で実験してみればわかる。心の中で何かわだかまりを持っている間は、祈りは通じない。祈りは心の分離している世界にはこない。

「全ての病を許し、不義を赦す」

と、詩篇103篇にありますように、私たちの凡ての不義が赦されてある。そこで、初めて病が治されるのです。病というのは罪とどんな因果関係が直接あるか、どうか知りませんが、直接の因果関係を問題にして、

「この病はどんな罪からか」

と考える必要はない。私たちが病んでいようが、健康でいようが同じ罪びとです。存在的に全ての人は罪びとです（ロマ３・10）。

この福音の世界が他のいろいろな宗教と質的に違うというならば、この「罪」と「罪の解放」

という点にあると思う。それでなければ、キリストは何も十字架にかかり給うことはなかった。私たちの根源的な失われた病――普通の病どころではない。病はただの枝葉にすぎない――死に至る病、これが実は罪だったのです。この根源的な罪、

「我を立ててやまざるところのもの、神の御意を本当に百％受け得ざるところのもの、また、これを行じ得ざるこの無力さ」

これが私たちの根元的な病なのです。しかし、

「それはいい、私がその道を開いたから、神様を百％受け得ざる病からすっかり変えて、私はお前の中に百％的な質的な角度のものを入れて、お前をこの世の中で完成させて進めて行く」

というのが、この罪のゆるし、否、実に根元的な病の医（いや）しなのです。私たちの根源的な魂の医しから始まっている。肉体のいやしは枝葉的に生じて来るでしょう。肉体はいつか朽ちていきます。それは、私たちが失われた「我」であるという現実を持っているからです。それに対する一つの結果として死が来る。しかし、それとは関係なく、否、それに打ち勝って、失われざるところの新しき、この魂の病をいやしに、魂を本当の生命の世界に入れた。

「魂が本当に死んでも死なない霊体を着せられつつ進んで行く」

というところに霊肉渾然（こんぜん）たる救いがあるのです。

●全存在の医し

「人の子の地にて罪を赦す権威ある事を、汝らに知らせん為に」（マルコ２・10）

と。それで本当に医されて、全存在の中核において医されてあるのですから、皆さん、この自分は療養所に居る病人だなんていう「ケチ」な考えは捨てて、実は最も積極的な力強い生き方がそこから出てきた。このキリストの霊の生命、原始の力です。

物理構造においてproton（プロトン）〔陽子〕なんていうのが原子の一番中核にあるが、私たちのこの陽子のproton（プロトン）に当たるものはキリストの「御霊の生命」です。キリストは百％に、十全に、全一的に御霊をもって入ってこられる。これが即ち、ペテロがここで現わしたところの事態です。

「中風の者に言い給う――11『なんじに告ぐ、起きよ、床（とこ）をとりて家に帰れ』」（マルコ２・11）

と、キリストが言われたように、ペテロも、

34 **かくてペテロ之に『アイネヤよ、イエス・キリスト汝を医(いや)したもう、起きて床(とこ)を収めよ』と言いたれば、直ちに起きたり。**

と。この、

「イエス・キリスト汝を医(いや)したもう」

という言葉の中に私たちは、

「子よ、汝の罪赦されたり」

という根源の響きを受けとり、全存在が医されるのです。私たちが医されるときに受けとり方が大事です。ただ病が医されると思って、そのことだけを感謝していたら、下手すると御利益になる。医されたということにおいて一番大事に受けとらなくてはならないのは、魂の潔め、罪のゆるし、これを受けとっていくときに、私たちの病める体はいよいよ潔められてゆく。この事態を誤魔化したら、病は展開して行かない。

私たちの問題は、一切をキリストに持ってくることです。キリストに持っていかなかったならば、どんな悲しみも、苦しみも、決して本当の展開をしない。キリストに持っていけば、本当に展開をします。何故ならば、キリストにおいては私たちの問題は解決されてある。解放されてある。キリストは、

「我すでに世に勝てり」

なんですから、

「我、汝のうちにありて勝つ」

のです、勝っているんです。聖書を読んだなら、これを端的に受けとりなさい。私たちはすでに二千年前に赦されている。今、現に赦されつつある。赦されたというこの完了形はどこまでも、私たちに現在完了となって推進力となってくださっている。

旧約のイザヤ書の44章に、

「21 **ヤコブよ イスラエルよ 此等のことを心にとめよ 汝はわが僕なり 我なんじを造れり なんじわが僕なり イスラエルよ 我はなんじを忘れじ** 22 **我なんじの愆(とが)を雲のごとくに消し なんじの罪を霧のごとくにちらせり なんじ我にかえれ 我なんじを贖いたればなり**」（イザヤ44・21～22）

とありますが、何と素晴らしい言葉ですか。こんな素晴らしい言葉が旧約の中にある。皆さんも、このイザヤ書はよく読んでください。このキリストの恩寵をはっきりと預言しています。

「私は既にお前を贖ってしまったのだよ、だから、帰りなさい」

ということです。

「お前が帰ってきたら、贖ってやる。お前は悪いことをしたが、悔い改めたから赦してやる」

というのではない。

「我々が神に逆らっているときに、その恩寵はすでに現われていた」

と、パウロも申しています。これでは帰らざるを得ないですよ。解放されてあるのに、帰らないでどこへ行くのですか。「帰る」というのは、

「そっちの方を向く」

ということです。

●潔め・義認・聖化

今日、新しく福音をお聞きになる方も決して、

「私はまだ一回目だから、なかなかだ」

なんて思ってはいかん。いきなり、十年前の人より早く入ってしまう。十年間、福音を聞いていても、もさもさしているが、けれども一晩にて、

「後（あと）なる人が先に」

と、キリストは言っておられるのですから、どうぞ、遠慮なしに入って来てください。神を人は忘れます。しかし、神様は忘れない。神様はみなその人の名をもって覚えていてくださる。キリストが覚えてくださるのは、

「何か悪いことをしないかな」

と思って覚えているのではない。キリストは、

「いいよ、大丈夫だよ、お前を救って愛している」

という愛の覚えですから、愛をもって覚えて忘れない。だから、こういう言葉を読んで、身読して瞑想して、聖書の世界の中に入っていく。キリストの道の中に私たちは踏み込まされて行きます。この前進無跡、前に進んで後には足跡がないような歩き方です。

大事なのはこの

「起きよ！」

です。この神の御声に従うということは、毎日の生活でこれを毎日実践していなければ、

「いざ鎌倉！」

〔註：緊急事態に際して「やってやるぞ」などと発奮した時に使われる慣用句〕

というときに、従えないわけです。その生き方は何かというと――私たちはいろいろの才能もありましょう。また、いろいろのものも持っておりましょうけれども――一切の我がものということは、これはみな神のもの、真に神のものとして、

「在れども無き、無けれども在り」

とパウロが言った、在れども無きが如き世界に自分の身をおいていることが大切です。

あの富める青年はたくさん財産を持っていました。そして、いろんなモーセの律法を挙

拳服膺（ふくよう）して誠に立派な青年でした。けれども、彼は財産にたくして、何か自分というものを惜しんでいた。即ち、私たちは自分を惜しんでいるときに、これは無的なもので、自分を何者かと思わないところに、その無、真空、無のような世界に無限の力がきたり、無限の生命が発動するという、この秘訣を受けとらなかったならばダメなんです。

「子よ、汝の罪ゆるされたり」

とは、

「汝は自分を何者かと思っていることからすっかり吹き飛ばされて、もう一切のものは何もない。そして全て神のものとして、本当に自覚している。そうしたなら、本当に限りなく展開していく」

ということ。大は宇宙、小は原子構造に至るまで、みなこの太陽と地球との間にはどのくらい素晴らしい空間がありますか。そこには空気も何もない、真空なる無の世界ですよ。マイナス273℃とか、あの絶対零度とか、そしてそこには何にも媒介するものはない真空の世界であるという。けれども、その真空の空間の中に限りない力が働いている。

原子構造においてもそうです。分子と分子の間においても、みなそうです。紙というものを見て、その構造をみて、みなつながっているかと思うと、そうではない。これを電子顕微鏡でも映さないようなもっと極微の世界を見てみたならば、分子と分子との間にそれの何千倍というような距離があるという。実はそういった距離の関係において驚くべき生命の力が働いているという。

私たちも、この「私」がない世界になると、神の力はそこに無限に働いてくる。この無は実存的な無です。そういった実存的な無の魂にさせられるのが、

「汝の罪ゆるされたり」

ということなのです。「罪がゆるされている」ということを観念するのではないですよ。「ゆるされたり」という事実を受けとるのです。そしたら、私たちは

「潔め・義認・聖化」

がピタッと一つになってくる。「義と認められる」ことは同時に「聖化されていく」というようにぐんぐん展開を始める。これが御霊の信仰の事態なんです。己潔しなんていっている世界が潔い世界ではない。「潔められる」ということは神の恩寵が、神の栄光が、生命が、愛が、智慧が、限りなく展開していく「聖」という世界です。こういうことをバラバラにおとりにならないようにしてください。

●十字架と復活は既にヨルダン河で

36 **ヨッパにタビタと云う女の弟子あり、その名を訳すればドルカスなり。**
此の女は、ひたすら善き業（わざ）と施済（ほどこし）とをなせり。

「ドルカス」とは羚羊（かもしか）という意味だそうですが、このタビタという言葉も面白い。「タビタ・

クミ」とキリストは言われた。「クミ」というのは「起きよ」という意味です。

37 **彼そのころ病みて死にたれば、之を洗いて高楼に置く。**「高楼に置く」ということは、ギリシヤ的な風習であったらしい。

38 **ルダはヨツパに近ければ、弟子たちペテロの彼処に居るを聞きて、二人の者を遣し『ためらわで我らに来れ』と請わしむ。**

わざわざ、ペテロに甦りのことを頼もうと思ったのではないらしいですが。

39 **ペテロ起ちてともに往き、遂に到れば、彼を高楼に伴れてのぼりしに、寡婦らみな之をかこみて泣きつつ、ドルカスが偕に居りしほどに製りし下衣・上衣を見せたり。**

「こんなに私たちにやってくれました」といって、彼女を慕っていたわけです。寡婦らにも非常に愛の深い女性だったのでしょう。

40 **ペテロ彼等をみな外に出し、跪づきて祈りし後、ふりかえり屍体に向かいて『タビタ、起きよ』と言いたれば、かれ目を開き、ペテロを見て起反れり。**

これはペテロが本当に神の前に、キリストの前に平伏す時に、雑念があってはいかんですから、彼らをみな外に出して、座を外してもらったわけです。しかも、

「ふりかえり屍体に向かいて」

というのですから、跪いて祈る時には本当にただ神・キリストに向かっている姿です。

「祈りし後、ふりかえり屍体に向かいて」

とありますように、ペテロは祈りにおいて既に聞かれたのです。本当に聞かれたということの確信を心の中にいただいたから、「タビタ・クミ」と言ったわけです。

41 **ペテロ手をあたえ、起こして聖徒と寡婦とを呼び、タビタを活きたるままにて見す。**42 **この事ヨツパ中に知られたれば、多くの人、主を信じたり。**43 **ペテロ皮工シモンの家にありて日久しくヨツパに留まれり。**

この甦りの記事はマルコ伝の5章にあります。ルカ伝にもありますが、マルコ伝を見ておきましょう。

「21 **イエス舟にて復かなたに渡り給いしに、大なる群衆みもとに集る、イエス海辺に在せり。**22 **会堂司の一人、ヤイロという者きたり、イエスを見て、その足下に伏し、**23 **切に願いて言う『わが稚なき娘、いまわの際なり、来りて手をおき給え、さらば救われて活くべし』**24 **イエス彼と共にゆき給えば、大なる群衆したがいつつ御許に押迫る。……**

35 **かく語り給うほどに、会堂司の家より人々きたりて言う『なんじの娘は早や死にたり、争でなお師を煩わすべき』**36 **イエス其の告ぐる言を傍より聞きて、会堂司に言いたもう『懼るな、ただ信ぜよ』**37 **かくてペテロ、ヤコブその兄弟ヨハネの他は、ともに往く事を誰にも許し給わず。**38 **彼ら会堂司の家**

に来る。イエス多くの人の、甚く泣きつ叫びつする騒を見、

ここでイエスはペテロ、ヤコブ、その兄弟のヨハネの他は連れて行かれませんでした。キリストにとっても真剣勝負です。「死にたる者」の甦りの祈りですから、自分の祈りにそって助ける者、即ち、魂を一つにする者だけと祈られた。ですから、さきほども「みんなを退けた」と言われたのも、それなのです。祈りの場において、

「二、三人わが名によりて集まるところに」

とありますように、キリストの御名によって、ピタリと一つにならなければ、キリストは一緒にそこに来られない。分裂があったらダメです。殊に特別に重要な祈りにおいて集まっている者たちの心が一つであるということも、自分の心が全一であることと同時に必要です。神との交わりの世界は本当に分裂のない姿が個人においても、また、団体においても極めて大事なことです。

39入りて言い給う『なんぞ騒ぎかつ泣くか、幼児は死にたるにあらず、寝ねたるなり』40人々イエスを嘲笑う。イエス彼等をみな外に出し、幼児の父と母と己に伴える者とを率きつれて、幼児のおる処に入り、

父母はこの悲しみの中にあり、子供の甦らせられるために切なる願いを持っておりましたから。

41幼児の手を執りて『タリタ、クミ』と言いたもう。少女よ、我なんじに言う、起きよ、との意なり。42直ちに少女たちて歩む、その歳十二なりければなり。彼ら直ちに甚く驚きおどろけり。43イエス此の事を誰にも知れぬようにせよと、堅く彼らを戒め、また食物を娘に与うることを命じ給う。」（マルコ５・21～43）

これはヤイロの娘を甦らせ給いしところのキリストの御業です。地にて人の罪をゆるす権威を持っている。即ち、彼はすでに十字架の死を負って歩いていた。同時に、また彼は復活の生命を持って歩いていた。地上のイエスは

「十字架の死と復活の生命」

とを常に身に体しながら、遂に十字架にかかりました。

「十字架と復活」

とはすでにヨルダン河で洗礼を受けられたあの時から始まっているのです。

●赦すことは愛すること

キリストは常にゆるしつつ、愛しつつ、伝道なされたのです。赦すということは愛することです。本当にゆるすということは愛の実力、生命の生命がなければゆるせない。私たちはいくら「人をゆるす」なんて言ったって、それは外側のゆるしでしかない。本当のゆるしはキリストの生命がなければゆるせない。そういうような

「ゆるしと生命を与える」
ということ、
「十字架と復活」
はキリストの毎日の実存を貫いていました。
彼のすべての恐ろしい言、私たちにとてもできないようなキリストの言、命令というものが、キリストの十字架・復活によって恵みとしてできるようにしてくださるのです。だから、キリスト教は教えではない。これは「道なり、生命なり」です。〔参考：曠愛新書６号『キリスト道』１９６７年発行〕

「我が言は霊なり、生命なり」

なのです。なんとなれば、彼の十字架・復活がその根底において支えて、これを貫いておられるからです。だから、その事実がときどき露な徴（あらわしるし）をもって現われてくる。ヤイロの娘が甦らせられたのがその一つの徴です。変貌の山も然り。湖上を歩くキリストも然り。これを本当に身をもって受けとらなければ、聖書はいくら研究して、ギリシヤ語がいくらできても、それは外側の話です。
皆さん、ギリシヤ語やヘブライ語を一字も知らなくてもいい。もう註解書は何もなくたっていい。この御霊のキリストを祈りの世界で受けとり、そして、御言を読めば、どんな聖書学者や神学者よりも御言を本当に持っている人になる。御言を我がうちに化体しなければ、

「霊なり生命なり」

となっていなければ、もう聖書を読むことは止めた方がいい。どうか、聖書を読むというならば、その角度の読み方をやってください。
日本のクリスチャンが何万人居ようが、そのような読み方をしていなければダメです。その読み方をしていくならば、どんな小さな群であっても、それは日本を背負っていく。キリスト教界を改革していく。腐った世の中に四十七士という魂がいた。これが本当の地の塩のような魂であった。いつまでたっても日本人の魂を動かすのはこの四十七義士の魂ではないですか。私たちはクリスチャンでありながら、上の空の観念信仰だったらキリストの御名を辱めることになる。
ペテロはこのキリストの信を受けとり、ヤイロの娘を甦らせたキリストを受けとりましたが故に、このようにしてタビタという女の人を甦らせた。

「イエス・キリスト汝を医（いや）し給う、汝を甦らせ給えり」

と。あの跛者を立たせた時に皆が驚いてペテロを見たときに、

「なんぞ我を見るか、我が信仰にも我が力にも非ず、主イエス・キリストが栄光を現わし給えり」

といって、彼はキリストを指さしたのです。

「少女よ、起きよ！」

と、キリストは手をとり給えば、即ち、直ちに起きた。キリストの霊の御手に私たちは捕まえられ、キリストのこの霊の御言によって魂が甦らせられていく。

聖書は黙っていますよ、黙っていますが、しかし、聖書の背後から御霊の声をもって、この御声が私たちに呻きを発し叫びを発し、読みながらあるときには、そこにぶっ倒れるような事態に驚嘆驚倒したときに、本当に入ってくる。人間の生命の世界はそれ以下のところではない。体裁ではない。

皆さんの生命は安っぽくない。一番素晴らしいものにぶつかるまでは、どうにもならない。そのかわり、一番素晴らしいキリストにぶつかったならば、どうにでもなるのです。神は一切のことをなし給う。ここに一切の自分を投じていく。私みたいな弱虫がとにかくなんだか知らないけれども、力が与えられてきましたのは、そういうわけです。また皆さん一人ひとりがそうです。

だから、孔子が、

「千万人といえども我往かん」

と言ったけれども、

「ああ、孔子さまは偉いなぁ」

ではない。私たち一人ひとりが「千万人といえども我れ往かん」と言える。然り、アーメンです。キリストの力が来れば千万人といえども我れ往かんです。これが信の世界です。

「心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くし、力を尽くして、我は汝を愛す。だから、そのようにお前も愛せるよ」

というのです。

朝に夕に祈って、祈り心持でもって進んでいく。朝は祈りをもって始まらなかったならばダメです。キリストの他力でもって引っ張り回されて行く。何という実力のキリストなるかな。これは、

「神の国は言（ことば）に非ず、力にあればなり」

と、パウロも言ったが、その言はまた同時に力である。

「言行一如、信行一如」

とどうしても言わなければいられないのです。